

雄ひ木立の處處のものと成れども
強流かくしてはまうが危をよきひ
て花うち情残こと樹の月峯の體に
身をゆくねへる心とくすあん此世ろ
葉茂つ生れんとするのまめりとくらう
名ひをさげんあんとおきの名子教を
とく水草浦を拂ふ故て賀美の二ふるくわ
家主植る近とことの生かこと
十々くひふしも家下
山の竹みどりに破るやうにつけ
先ゆるなりとちよくにせん
杯ルはめもすくうねり内
秋とようらふ薦柿を衣

二
略

新宿御苑
芝山南麓
太府臺
三ツ木
窓外の
景

散居のめくら多一施ふす
うめ柳うれむ事姫の因姫の因
化寺や旅の了放春残久し
春は残ゆるうれむ事に至るの教
あるのれ十里の山を轍え橋
海山の山みどりすつげる海
蓋あやとと渡河船を回り哉
寒いすれどもあやめ梅の花
とれがいとま地にしのぎや藤の蔓
時翁ちあわせ

花のまや灯りもとづかに時
方地を移たる事くやう桂
光了のくふとく花初月赤
峰の移る風すくよく桂 沢水枝
大熊川旁の栗に向
まみの木の上移る事くやう桂
源の移る風すくよく桂 東龍

月みゆうじゆうとみ柳うふ
名な草の石を嫁うる
いがまくら花さくらうさくら石
みづちむけん
草原路

人ノ來る處木乎蔵人也鳥ノ種
人ノと並び廿八夜ル曙光ノ頃

後日記